第１課　創造と堕落

【暗唱聖句】

「主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」創世記15：5，6

【今週のテーマ】

今週は不一致の根本的な原因である罪の問題と、神様との関係を回復するために神の民が選ばれたことについて学びます。

【日曜日・一致の基礎としての愛】

神様がこの世界を創造されたとき、そこには調和と一致、そして愛が満ちていました。それゆえすべてのものは「極めて良かった」（創世記1：31）のです。特に人間に関しては、神様ご自身が「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」（創世記1：26）と書かれてあります。「我々にかたどり」とは姿形が似せて造られたということ、そして「我々に似せて」とは内側の性質も似せて造られたということを意味しています。つまり、人間は神様のような姿に造られだけでなく、神様のご性質、すなわち愛を持つものとして造られたのです。そしてこの愛が人と人とが一致するときの基礎となります。ヨハネは愛と神様と私たちとの関係を次のように教えています。

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです」第一ヨハネ4：7，8

私たちが教会の中で互いに愛し合うことができるのは、神様から生まれ、神様を知っているからです。なぜなら神様は愛であり、愛は神様から出るものだからです。もし愛することのなければその人は神様を実は知らないのです。神様を知らないから愛することができないのです。

「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」第一ヨハネ4：16

神様と愛はイコールで結ばれています。神様のご性質が愛というよりも、神様は愛そのものなのです。神とは愛であり、愛とは神なのです。単に道徳や観念を教えているのではないのです。したがって、愛の中に生きる人は神様の中に生きるのと等しいことであり、神様もその人の中に生きてくださいます。これは神秘であり奥義です。

【月曜日・堕罪による影響】

この天地万物がまだ造られる前、世界は混とんとしていたと聖書は言います。神様の創造の業は混とんとした世界に調和と一致をもたらすものでした。神の国は常に調和があり、一致しているからです。ところが、アダムが罪を犯したことによって、この平和な世界の調和が乱れ、不一致や不和が生じました。神様がアダムに「取って食べるなと命じた木から食べたのか」と言われるのとアダムは「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と責任転嫁しています（創世記3：11，12参照）。アダムとエバの間の一致はもろくも崩れ去ったことがわかります。しかも、アダムは「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女」とエバのことを表現し、暗に神様にも責任があることをほのめかしています。神様との関係においても平和を失ってしまいました。これが罪がもたらすものなのです。では、実際罪を犯した結果、何がもたらされたでしょうか。

「神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する」創世記3：16

「神はアダムに向かって言われた。「…お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ…お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」創世記3：17～19

罪を犯した後、神様はエバに対して2つのことを言われました。1つはお腹を痛めて子供を産むということ。もう一つは男が支配するということです。アダムに対しては生活の糧を得るために生涯苦労すると言われました。この二つのことはその通りわたしたちの身に起きています。しかし、これは罪を犯した人間に対する罰なのでしょうか。よく考えてみると、確かに女性はお腹を痛めて子供を産みますが、出産後は痛みは消え命の喜びが待っています。確かに男性が力で女性を支配することで多くの悲劇が起こってきましたが、しかし主に使えるように夫に仕え、夫は自分を愛するように妻を愛することで平和な家庭を築くことができるとも約束されています。また男性は家族を支えるために一生苦労することになりますが、呪われたはずの土に種を蒔けば実がなるのです。そこにはやはり命の喜びがあります。これらはすべて神様の赦しを現わしているのです。そして本当の罰を受けられたのは、わたしたちの身代わりとなったイエス・キリストただ一人なのです。

しかし、アダムの不服従は長い時間をかけてあらゆる被造物に対して悪い影響を与えていきました。それをアダムも目の当たりにしていくことになりますが、その中でも最大の悲劇は息子のカインとアベルの物語でしょう。そして「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（創世記6：5）と言わしめるほど、人間は堕落していったのです。このときノアの家族だけが選ばれて、再出発することを神様をご計画されます。

【火曜日・さらなる不一致と分裂】

大洪水の後、ノアの家族たちはゼロから再出発を始めます。ところが、洪水の後の物語として聖書が記録しているのは、バベルの塔の建設でした。バベルの塔の物語は現代人にも通ずる教訓に満ちています。

1. 混乱…バベルという言葉は混乱という意味があります。人々の心は不安と混乱に満ちていました。もう一度大洪水が襲ってきたらどうしようと不安でした。神様が二度と洪水で地を滅ぼすことをしないと約束された言葉を信じることができなかったのです。神様の言葉が信じられなくなると、人は不安と混乱に襲われます。
2. 高慢…バベルの塔を建設するにつれ、高慢な心が芽生えました。自分で自分を救おうという試みは、高慢に表れでもあるのです。
3. 偶像崇拝…バベルの塔は高層神殿と考えられており、塔の上には偶像の神が祭られる予定だったと考えられています。
4. 偽の一致…彼らは「全地に散らされることのないようにしよう」と言い、偽の一致を叫びます。しかし、このときの神様の御心は「地に満ちよ」であり、1か所に集まることではありませんでした。
5. 神様の介入…神様は介入され、言葉を混乱させられます。もともとあった混乱が、塔を建てることで安心を得ようとしましたが、結果的にさらに混乱することになります。これは神様のみに信頼せよという教訓でしょう。神様は人々は全地に散らされます。散らされていく中で神様にだけ頼って生きるように教えられたのです。

【水曜日・神の民の父、アブラハム】

信仰の父と言われるアブラハムを通して、クリスチャンの一致の中心となる基本的なことを学ぶことができます。

「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。」へブル8：11

第一に服従です。アブラハムは行き先も知らず神様に言われるままに出発し、服従を示しました。第二にアブラハムは神の約束に望みを置きました。そして神様を信じる信仰によって義とされました（「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」ローマ3：3）。このようなアブラハムの中に見られる神様への服従と信仰、そして希望のゆえに、神様はアブラハムをわたしの愛する友と呼んでいます。

「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友アブラハムの末よ」イザヤ41：8

神様から愛され友と呼んでいただける関係にあるとき、一致の愛も自然に溢れてきます。

【木曜日・神の選ばれた民】

神様はイスラエルをご自分の民として選ばれ、神様の知識が保存し、神の愛と救いを証する使命をお与えになりました。確かにイスラエルの民のおかげで、聖書は今に至るまで残され、わたしたちは神様の言葉を知ることができるわけです。イスラエルの民が神様から選ばれたのは、彼らが他の民族よりも優れていたからでしょうか。聖書は次のように教えています。

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに…」申命記7：6～8

イスラエルの民は貧弱だったからこそ、神の愛によって選ばれたと書かれてあります。神様は高慢な人ではなく、へりくだる人を用いられます。それは自分を誇ることがなく、神様を誇るようになるためです。このような神様から選ばれたイスラエルの民にはそれにふわさしい品性や能力、そして神様の深い愛を惜しみなくお与えになりました。その名残の一部は今でもユダヤ人の中に見ることができます。ポイントは愛も豊かに与えられるという点で、この愛によって本来は一致へと導かれるのです。私たちも神様から選ばれた民であるならば、聖霊の愛と能力が豊かに与えられ、それを持って教会は一致し、発展していくことでしょう。